



親子でタケノコ掘りin首都大・松木日向緑地

4月15日（土）・22日（土）・29日（土）、「地域ボランティアプログラム」のプレ企画として、ひなた緑地遊学会（以下、遊学会と言う）の方々と本学生命科学コースの加藤先生のご協力のもと、「親子でタケノコ掘りin首都大・松木日向緑地」を実施しました。

近隣の小学校の親子や障がいのある方々を招いて行われたこの企画は、今年で2回目（遊学会が単独で開催したものもあわせると4回目）。ボランティアとして参加してくれた学生も29人と、昨年の参加者数の約5倍になりました。

昨年に比べ、今年はタケノコがかなりの不作でしたが、多くの学生や地域の方が参加してください、大変楽しい活動となりました。

・地域の小学校との活動

22日は柏木小学校、29日は愛宕小学校と南大沢小学校を招待し、それぞれ親子と先生方あわせて121人、116人が参加してくれました。

注意事項の説明があった後、早速、タケノコ掘りを始めましたが、今年は不作のため、見つけることが難しく、皆さん苦労をされていました。なかなか見つからない場合は、大学生ボランティアが自分たちが見つけたタケノコを「ここにあるよ」と教えてあげたり、一緒に探しました。掘り出すことも一苦労で、タケノコの周りには根茎があり、1つを掘るのに30分ぐらいの時間がかかり、汗だくになりました。しかし、途中であきらめずに、根元から綺麗に採れるまで粘り強く取り組んでいる子どもたちが多く、学生ボランティアは、できるだけ子どもたちが自分の力でやりきることができるよう寄り添ってサポートしていました。掘れたときの子どもたちの笑顔が印象的でした。

また、竹林の中を歩いて、タヌキの巣を観察したり、蛇を発見するなど、豊かな自然に触れて、子どもたちは大興奮でした。高学年は、竹の間伐体験も行いました。竹の切り方を説明したのは、昨年の「地域ボランティアプログラム」で活動した学生たち。昨年1年で、遊学会の方からご指導いただき、学んだ知識や技術を今度は自分たちが教える立場となり、小学生に分かりやすく説明しました。小学生たちは、倒した木を短く

切って、コップや一輪挿しをつくっていました。自然のものを活かして手づくりのものを作る楽しさを感じてもらえたのではないかと思います。

・「自立ステーションつばさ」との活動

15日は、障がい者の自立支援をしている団体「自立ステーションつばさ（以下、つばさと言う）」のメンバー18人と関係者5人、姉妹団体の方8人の合計31人と共に活動を行いました。つばさの方々とは、普段から色々な形で連携させていただいているが、この企画に参加してもらうのは今回が初めて。本学からは、昨年の「地域ボランティアプログラム」に参加してくれた大学院生と生命科学の院生、職員3人が参加しました。

つばさの方の中には、車いすを用いる方や脚が不自由な方がおられたため、普段自分たちが何気なく歩いていた歩道や活動していた緑地が、まだまだそうした人々にとって気軽に足を運べる場所ではないのだ、と感じる機会となりました。

また同時に、遊学会の方々が整備されているこの場所は広く開放的であったため、車いすの方でも竹林の中に入り、タケノコの生えている様子やタケノコ掘り体験などを行うことができ、竹林整備によって多様な人々が自然の恵みを得られるのだと実感しました。

タケノコが不作であったこともあり、竹林に住むタヌキの巣の見学や、竹を使った箸や皿を使った食事など、タケノコ掘り以外の竹林で楽しめる企画も様々行われました。

普段はなかなか足を運びにくい竹林での活動は、つばさの皆さんにとって、とても刺激的なものになつたようです。

・参加者からの声

小学生や自立ステーションつばさの方からは、「見つけるのが大変だったけど、楽しかった～」「がたがたのみちがたのしかった」「たけのこたべた。おいしかった」といった感想が聞かれました。ボランティアとして初めて参加した大学生からは、「大学にこんな自然があることを知らなかった」「子どもたちとの交流が楽しかったので、また機会があれば参加したい」との声がありました。自然に触れながら交流が深まった1日となりました。

地域 ボランティアプログラム

プレ企画 「タケノコ掘り」 報告

2017/4/15,22,29



自立ステーションつばさの方々との活動

車いすで参加してくれた方は2人。竹林に入るまでは険しい坂や凹凸のある道など様々なバリアがありました。ボランティア学生の頑張りもあって、安全に竹林まで誘導することができました。林の中は落ち葉が敷き詰められていて、非常にふわふわとした歩き心地です。



みんなで活動の振り返りを行った

小学生との活動では、最後に各学年の代表者から感想やお礼の言葉が述べられました。大学生ボランティアも感想を伝え、お互いの感想を交換することで、大学と地域が連携することの良さや、ボランティアとしてのやりがいを感じることにつながりました。